言語学論叢第12号（1993）

日本語の敬語について

―中国の日本語学習者と中国で日本語を教える人のために―

李　欣

1．はじめに

本稿では、敬語表現の使い方、および日本語学習者が敬語をどのように身につけていくかについて、よく見られる誤用例を含めながら、筆者が今までの日本語教育経験の中で考えたことをいくつか述べてみたい。

そもそも敬語とはどのようなものであろうか。まず、次の表現を比べてみる。

（1）a．コーヒーをくれ。
（1）b．お茶をちょうだい。
（1）c．水をください。
（1）d．水をくださいませんか。
（1）e．水をいただけませんか。

これらはすべて喫茶店で客が店員に飲物を持ってくるように頼む表現であるが、言い方の微妙な差によって、言われた店員としてはかなり気分が違うはずである。このようなことが敬語の出発点であると思われる。日本語学習者の中には、「敬語」ときくと堅苦しい、うっとうしい、面倒だといったマイナス面ばかりが思い浮かび、できれば敬語を使うような場面には出会いたくないという人も多いかも知れない。しかし、人間である限り私たちは社会の中でほかの人々と関わり合って生きていかなければならない。そして、その関わりの橋渡しとなるのが言葉であり、日本語の場合には自分以外の人を尊重し思いやる気持ちが敬語という形を取って出てくるのである。敬語を形式的で無意味なものというように否定的にみるのではなく、人間関係をより円滑にするための一つの方法として積極的に活用していく必要がある。

１９４２年の日本国定教科書「初等科国語巻七」（国民学校第六学年前期用の第四課）「敬語の使い方」は次のように述べている。

> 文化の進んだ国、教養の高い国民にあっては、礼儀を重んじ、言葉遣いを丁寧にする事が非常に大切な事になっている。特に、我が国語には、敬語というものがあって、その使い方が特別に発達しているから、言葉遣いを丁寧にするためには、ぜひとも、敬語の使い方をよく心得て置かなければならない。日本語の敬語は世界に言語に例のない独自のものであり、敬語は皇室中心の日本の国体と、家族制度の美風の反映である。

この文から、歴史的に見ても敬語が日本語の中でどのような位置を占めているかが分かるように思われる。

２．敬語は中国語と日本語とでは用法が異なる

このように敬語は昔から日本語の特色とされてきた。そして、敬語は日本人の謙譲の美徳の現れであるとも言われている。しかし、本当に敬語を日本語独自の特色と考えて良いかどうかには疑問がある。勿論、一言語として日本語の敬語が複雑に発達していていろいろな言い方に富んでいるというその事は認めない訳にはいかない。よくあげられる例であるが、中国語では一人称は「わたし」一つで、二人称も「あなた」一つで済むのに対し、日本語では、一人称は「わたくし」「わたし」「ぼく」「俺」等、二人称でも「きみ」「あなた」「おまえ」などから「手前」「貴様」にいたるまでさまざまな言い方がある。動詞の場合でも、尊敬と謙譲の言葉が異なるので、相手の動作に関する言葉と自分の動作に関する言葉にはっきりした使い分けがある。中国語は相手との関係にかかわらず一、二人称とも「行く」なら「行く」、「見る」なら「見る」の一語で済むのに対し、日本語は「行く」や「見る」という言葉だけでは済まず、相手との関係次第で、一人称なら「参る」あるいは「拝見する」、二人称なら「いらっしゃる」や「ご覧になる」という形が用いられるといったように複雑である。しかし、中国語にも次のような敬語の使い方がある。たとえば、一人称の場合は「我去」（わたくしは行く）とか、

「我看」（わたくしは見る）のように敬語は使わないが、二人称の場合は常用の呼称「你」ではなく「您」という敬語を用いて「您去」（あなたは行く）とか、「您看」（あなたは見る）という形が使われる。動詞そのものは変わりはない。このように考えると、問題は日本語の敬語が中国語と比べてより複雑でしかも中国語とは用法が異なるという点である。

ある言語を正しく使うには言語環境が大切である。ルールを心得ていさえすればそのまま使えるというようなものではない。細かい点については、毎日の生活の中で自然に身につけていく以外に効果的な方法はないように思われる。身近にいる日本人の言葉をモデルとするのが最も大切なことと言えよう。敬語のモデルがいつも身近に与えられていると模倣する頻度は自然に高くなるからである。

3．敬語の意義

敬語とはいったい何なのかという事について、辻村敏樹(1992)は次のように述べている。

> 敬語はこれを広義に考えるのと狭義に考えるのとで、かなりその概念内容を異にする。広義には「おっしゃる」とか「いらっしゃる」といったようないわゆる敬語だけではなく、普通の言い方や卑しめる言い方をも含めて、対人関係に応じて変化するすべての語形を言う事がある。そしてそれは近年の一つの傾向でもある。ただ、用語として考えると、「敬語」という言葉はその文字面からいってもこのように広義に解するのは不適当であり、広義で言う場合は、人に対する上下親疎などの待遇の仕方が言語の形式に現れたものとして、「待遇語」とか「待遇表現」とか呼ぶのが適当である。

待遇表現というのは、言葉を使って話をする場合に、表現する人が、自分自身、話をする相手、話題の人物のそれぞれの間で、上下親疎の関係、良悪の感情などがどうなっているかを判断し、それを表現の中に反映させたものである。このように待遇表現はさまざまな人間関係を反映するものであり、敬語は待遇表現の中の一つに位置づけられる。

日本語では、特に話し言葉において、待遇意識抜きで表現を行うことは不可能に近い。日本語母語話者は常にその場における対人関係の把握に基づいて言葉を選んで表現するのであり、中国語母語話者からみれば日本語の学習の中でいちばん難しいのはそのような待遇表現、特に敬語である。敬語の学習が難しいと言われるのは、文法形式の難しさのためではなく、複雑な人間関係を考えた上で一つの適切な表現形式を選ばなければならないためである。人間関係がきわめて複雑な今の社会で、どういう場合に、どの相手に、どのぐらいの敬度を持った敬語を、どの程度使用すればいいか、さらには、どうすれば文の調和が保てるか等というのは非常に難しい問題である。

敬語は相手によって言葉を使い分けるものである。中国の日本語教育においては、学習者は授業中に限らず日本語教師には日本語を用いることが奨励され、当然敬語を使うべき事態になる。例えば朝の挨拶一つをとってみても、友人、後輩なら「おはよう」が、先生には「おはようございます」である。また、日常的に話をしていても、友人、後輩が相手なら文末が「……じゃないの」だが、先生だとそうはいかず「……ではないのですか」となる。礼を言うときも前者なら「ありがとう」だが後者なら必ず「ありがとうございます」となるし、ものを頼むときも前者なら「悪いけど」、後者なら「恐れ入りますが」となる。このようにあげていくときりがない。敬語は友人同士で使うとよそよそしくなって嫌われるが、目上の人には使うのが当然であり、逆に自分が後輩からぞんざいな口をきかれると気分を害したりする。相手によって言葉を変えているのは確かだ。中国の日本語学習者が日本語の敬語学習に困難を感ずるのは、話の場における対人関係の把握のしかたに作用する要因のこのような複雑さを学びとりにくいことと、それらの要因に応じた適切な言葉の選び方に習熟しにくいことに多くの原因があるようである。

4．敬語の分類と使い方

日本語の敬語は、よく知られているように、丁寧語、尊敬語、謙譲語の三種類に分けるのが普通である。

尊敬語は、目上の人や敬意を表すべき人が聞き手や話題の人であるとき、その人に属する物およびその人の行為や性質などに関してそれを高めて敬意を表す言葉である。謙譲語は、話し手側を低めることにより間接的に聞き手や話題の人物を高める言葉遣いで

ある。丁寧語は、物の言い方を丁寧にすることにより話題の人物というよりは常に聞き手に敬意を表す言い方である。また、丁寧語には聞き手に対する配慮を示すというよりは話し手自身の言葉遣いを上品にする使い方もあり、これを美化語ということもある。これも自分の言葉の品位を高めることにより間接的に相手方に敬意を示そうとしているとも言える。

さらに細かい分類を施すこともあるが、本稿では、特に尊敬語と謙譲語だけをとりあげて考えてみたい。現実に次のような現象がみられる。すなわち、教室で教えるときには学生は皆暗記してきちんと答えられるのに、授業後に教員に会ったりすると依然として敬語が使えないし、使っても変な表現が出てくるのである。問題がいったいどこにあるのかについて考える前に、まず尊敬語と謙譲語とについて具体的に見ていくことにする。

（一）尊敬語：相手や第三者について尊敬の気持ちを表すもの。例えば

a．人を呼ぶ言い方：このかた、そのかた、あのかた、どなた、先生、お客様、
～さん、～殿、など。

b．人に属する物、事を呼ぶ言い方：お～、ご～、貴～、など。

c．人の行為、状態を呼ぶ言い方：いらっしゃる、おっしゃる、おいでになる、
なさる、くださる、見える、召し上がる、あがる、
お（ご）…くださる（お伝えくださる）、
お（ご）…になる（お書きになる）、
お（ご）…です（お帰りです）、など。

（二）謙譲語：話し手側を低めることにより、間接的に聞き手や、話題の人物を高める言葉遣い。例えば

a　人を呼ぶ言い方：わたくし、小生、手前、など

b　人に属する物、事を呼ぶ言い方：弊～（弊社）、粗～（粗品）、など。

c　人の行為、状態を呼ぶ言い方：参る、申す、申し上げる、致す、あげる、
さしあげる、いただく、伺う、うけたまわる、
お目にかかる、お目にかける、かしこまる、
お（ご）…する（お借りする）、
お（ご）…申し上げる、

お（ご）…いただく（ご利用いただく）、
お（ご）…願う、～てあげる、～て差し上げる、
～ていただく、など。

上のような例から見ても日本語の敬語がどんなに複雑かが分かるだろう。動詞の連用形とともに使う尊敬の形はほとんどの動詞に使える。尊敬語の場合は、特に口頭で表現するときは良く接頭語がつき、「お（ご）……なる」とか、「お（ご）……ください」等の言い方がある。また、「れる・られる」（受け身形と同じ動詞）の形も使う。この形の敬度は前より低いと思われるが、規則的で現在広く使われている。特に男性の話および新聞、論文、公用文等の書き言葉でよく使用されているようである。謙譲語の場合も、「お（ご）」を動詞の連用形、名詞につけることがよくある。これは上位者の動作や状態につけて下位者の謙譲の気持ちを表す言い方である。

この「お」と「ご」の使い分けについての一般的な原則は、本体の言葉が和語なら「お」がつき、漢語なら「ご」がつくというものである。中には「お返事」「ご返事」のように両方つく言葉もある。このような接頭語は、相手の所有、所属、性質、状態に関わるものにつけることで相手への敬意を表す。

以上のような使い方は確かに複雑ではあるが規則的であり、丸暗記もできるしそんなに難しくはないと言う人もいる。しかし、実際に使うときにはそう簡単にはいかない。ときには相手側に使うべき言葉を自分側に使ってしまう。ことに動詞の使役形の下に「いただく」という言葉をつけるときには、尊敬語かそれとも謙譲語か迷ってしまったりして間違えやすい。このように学習者にとって敬語の使い方はいろいろとやっかいな問題を含んでいる。

5．敬語を使うときに間違いやすい文

次に、間違いやすい文を分析してみよう。

（2）父から先生によろしくおっしゃってくれと便りがありました。

「おっしゃる」は「言う」の尊敬語であって動作主体に対する敬意を示すものだが、この例では話し手自身に敬意を示したことになる。「先生」に対する敬意を正しく表すためには、「よろしく申し上げるように」などとするべきである。

（3）先生の申されたことは確かに名案です。

「申された」の「申す」は謙譲語だから、いくら尊敬語の「れる」をつけてみても動作主体である「先生」に対する正しい敬語にはならない。「おっしゃった」あるいは「お話しになった」「言われた」が正しい言い方である。

（4）長い間、この家でお過ごしになられました。
（5）先生は先ほどお帰りになられました。

これは「お（ご）……になる＋れる」の形である。目上の相手に対して失礼になってはいけないと思う余り敬語が過剰気味になってしまった例と言える。「お過ごしになりました」とか、「お帰りになりました」だけで十分であり、下の「れる」は本来余計なものである。

（6）失礼ですが、どちらから参られましたか。

「参る」は「来る」「いく」の謙譲語で自分側に対して使うものであり、動作主体に対する敬意を示さない。たとえ下に尊敬の「れる」をつけても不自然であることに変わりはない。正しくは「いらっしゃいましたか」「お出かけになりましたか」「行かれましたか」などとすべきである。

（7）わざわざお送りして下さらなくてもよかったのに。
（8）この品なら、きっとご満足していただけると思います。
（9）私たちの会にもご参加して下さい。

「お（ご）……する」は謙譲語であって、動作主体（例（7）（9）では「送る人」

「参加する人」）に対する敬意ではなく動作の対象となる人への敬意を示す。したがって、ここでは「送ってもらう人」や「参加を求めている人」である話し手側に対する敬意となってしまい、不自然である。本来、「下さる」「いただく」が補助動詞的に使われる形式には、「お……下さい」「お……いただく」と「……て下さい」「……ていただく」の２種類がある。この二つの形式が混同すると上のような言い方になるのである。特に「お」や「ご」のつく場合は、例（８）に見られるとおり、「ご満足いただく」「満足していただく」のように間違えやすい。（７）～（９）ではそれぞれ「送って下さらなくても…」「ご満足いただける」「ご参加になって下さい」あるいは「ご参加ください」などとするのが正しい文である。

（10）昨日、お茶のお稽古をお休みしました。

「お待ちする」「お見せする」などの謙譲語と並べて考えてみると、「お休みする」はおかしくないように思われる。しかし、謙譲語の場合は「待つ」「見せる」など、敬意を表すべき人に直接関係する行為、動作を表す動詞に「お（ご）……する」という形式をかぶせて成立するものであって、「休む」という動詞はそれらの動詞とは性質が違い、基本的には話し手のみに関係する行為、動作を表す自動詞である。したがって、このような場合、「昨日、お茶のお稽古を休みました」と言うのが普通である。

（11）もうご出発されました。
（12）いつ、ご入院されたのですか。

「出発される」「入院された」で十分に尊敬語になっており、「ご」がよけいである。もし「ご」を使うなら、「ご出発になる」「ご入院なさる」のような形をとらなければいけない。それなら尊敬語の型にはまる。

（13）庭のほうへ参りましょうか。

この文は、庭へ行くのが自分だけなら問題がないが、もし相手に誘いかけているのなら、相手の行為を謙譲語で言っていることになり、正しい敬語とは言えない。このよう

な場合には次のように言うのがよいと思われる。

(13') 庭のほうへいらっしゃいませんか、(私も参りますから)。

つまり、相手の行為と自分の行為とを分けて、まず相手の行為を尊敬化し、必要なら、自分の行為を後からつけ加えるということである。また、例えば、ある先生に電話をして不在だったので電話に出た人にことづてを頼むという場合を考えてみる。

(14) ××から電話があったとおっしゃって下さい。
(15) ××から電話があったと申し上げて下さい。

例(14)のように「おっしゃって下さい」と言うと、その電話に出た人に対する敬意はあらわれるが、先生に対する敬意がなくなってしまう。一方、例(15)のように「申し上げて下さい」なら、「申し上げる」で先生に、「下さい」で相手に対する敬意を表しているので一応はよさそうであるが、それでも「申し上げる」では先生よりも相手を低く見ていることになり、やはり少々失礼である。この場合は「……とお伝え下さい」か「……とおことづけいただきたいのですが」などの言い方をしたほうがよいだろう。

このような敬語誤用例はいくらでも拾い集めることができる。しかし、敬語の正しい用法に通じていなければ、そのような正誤の判断はできない。判断基準を確立することも学校での日本語の「文法教育」の一つの目標である。

上に掲げた例は敬語を使うときに見られる文法上の誤りであるが、問題はこのようなことだけではない。敬語の文法形式そのものへの意識は高まっても、それぞれ具体的な場面でどう使い分けたらよいかはっきり理解していないとなかなか正しい敬語を身につけることはできない。教師が誤った敬語の使い方をするようでは問題である。ふだん教えるとき、会話場面を具体的に設定し、学生にいろいろな場面のモデル会話を実際に行わせることも重要である。

6. 敬語学習上の他の注意点

非母語話者が日本語の敬語を学習する際には、ほかにも次のような点に注意が必要である。

（ア）日本語の敬語は、ただ目上の人や尊敬するべき人（地位、身分、年齢が上の人）に使うだけでなく、親しくない人（よく知らない人、身分のグループに属さない人）に対しても使う。一方、目上の人であっても親しい相手であれば、敬語を使わないこともあるし、会議、学会、発表会、スピーチ、手紙などでは親しい人にも敬語を使用する。また、親しい人同士で話す場合には、話題の人物が目上の人であっても、その人がその場にいるかどうかで敬語の使い方が変わってくることがある。

（イ）一つの動詞に対して二重に敬語を使うのはまずい。目上の人に対する敬語は難しいと思う人が多く、そのような人は相手に対して失礼になってはいけないと思う余り過剰な敬語を使いがちである。正しく敬語を使うということは、過剰に丁寧な言葉を選択し一分の隙も与えないようにすることではなく、場面に応じた適切な言葉を使い分けていくことである。

（ウ）文が重なっている場合は主節の動詞のみを尊敬語にすれば十分である。人によっては、目上の人に対する場合、このような文で敬語を使いすぎるように思われる。相手を立てるためにどのように敬語を用いるかということばかりを考えすぎると、本当の意見を表明するのに障害にもなりかねない。

（エ）相手に敬語を使うときの身体的姿勢などにも注意が必要である。敬意の表現には、言語的手段によるものと非言語的手段によるものがある。いくら言葉が丁寧でも気持ちがこもっていなければ敬語を使う意味はない。態度、しぐさ、表情、ものの言い方、声の高さ、大きさ、話の速さなどにも敬意はあらわれる。

何事にも良いところと悪いところがあるように、敬語にも二面性がある。敬語の良い面は、話し相手の機嫌をそこねないことと話者の良識を判断するのに敬語の使い方がよい材料となることである。例えば、話しているときに、話題にのぼっている人物に対しきちんとした敬語の使い分けをすれば、話し相手の信頼を得ることにつながる。逆に、敬語の悪い面は話者と相手との間にある種の隔たりをつくってしまうことである。これは敬語本来の働きではないかもしれないが、実際には敬語を使っている限り話者と相手は親密になりにくいようである。具体的には、議論の際に「どう思っていらっしゃいますか」というような表現は丁寧すぎて議論に向かない上に、必要以上に相手との隔たり

を作っているような気がする。

何と言っても、人間関係が親密になればなるほど、「目は口ほどに物を言う」というたとえのとおり、以心伝心の形で話をし合ったり省略した文節や一言で用が足りたりしやすいということは確かである。とは言え、日本語教育の中で敬語の学習はやはり非常に大切な意味を持っている。学生たちが教師の音声を通してはじめて正式の敬語に接するということを考えると、教師側には規範を示すという重い責任が生じるのである。

敬語は、自分を低く客観的な立場に置くゆとりがなければ出てこない。互いに敬意を持ち互いの立場を尊重しあうという気持ちがあるなら、まず何よりも愉快な気持ちで言葉を交わすのが社会人としての最初の要件といってもよいだろう。言葉は人格を表すともいわれるものであり、正しい敬語を身につけることは日本語を学ぶ学習者にとって非常に大切であると思われる。

【参考文献】

林四郎・堀川直義（編）.（1969）『敬語（用例中心ガイド）』. 明治書院
林四郎・南不二男（編）.（1973）『現代の敬語』（『敬語講座』第六巻）. 明治書院
林四郎・南不二男（編）.（1974）『敬語用法辞典』（『敬語講座』第九巻）. 明治書院
平林周祐・浜由美子.（1988）『敬語』（外国人のための日本語　例文・問題シリーズ）. 荒竹出版
堀内武雄.（1976）「現代敬語用法辞典」.『国文学』,21
金田一春彦.（1990）『日本語の姿』（『日本語講座』1，新装版）. 大修館書店
金田一春彦.（1977）『日本語の特色』. 講談社
金田一春彦.（1977）『日本人の言語生活』. 講談社
国立国語研究所（編）.（1990）『敬語教育の基本問題（上・下）』.
国語学会（編）.（1985）『外からみた日本語、内からみた日本語』. 武蔵野書院
久保田修（編）.（1990）『日本語の表現』. 双文社出版
丸山敬介.（1990）『経験の浅い日本語教師の問題点の研究』. 創拓社

水谷修・水谷信子.（1988）『外国人の疑問に答える日本語ノート』. ジャパンタイムズ
森田良行.（1990）『日本語学と日本語教育』. 凡人社
西田敏直.（1987）『敬語』. 東京堂出版
大石初太郎.（1976）「敬語が正しく使えますか」.『言語生活』,295
大野晋・柴田武（編）.（1976-78）『岩波講座　日本語』. 岩波書店
辻村敏樹.（1992）『敬語論考』. 明治書院
宇野義方.（1985）『敬語をどのように考えるか』. 南雲堂

On the Honorifics in Japanese

- for learners and teachers of Japanese in China -

Li Xin

Honorifics is one of the most difficult elements for Chinese learners of Japanese. Chinese language also has some honorifics, but the usage is very different from the Japanese ones and Japanese honorifics are much more complicated than Chinese ones. It comes as a big question, therefore, to whom, in what conditions, with what words, we must express our respect. From my experience in teaching Japanese I collected ample data of students' errors with honorifics. In this paper I will analyse them and develop my theory as follows:

1) Learners have to pay attention to some points such as:
   a. the difference between written language and spoken language,
   b. in what conditions they can use honorifics,
   c. how they must use honorifics in complex sentences.
2) Using honorifics has both advantages and disadvantages in connection with human relations.
3) Nonverbal elements play an important role when using honorifics.

Learning honorification is a very important process in Japanese education and I think that it is indispensable for learners of Japanese to get used to using honorifics.